

かわら版  
**哲学たいけん**

第4号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447：TEL 0566-41-8522

：FAX 0566-41-7761



茶のつどい（無我苑大茶会）

哲学たいけん村

無我苑開村3周年記念

梅原猛名誉村長の

古希を祝うつどい

— 平成七年六月十日 —

哲学たいけん村無我苑も開村3周年となり、名誉村長の梅原猛先生は齢七十の古希をお迎えになった。

これをお祝いして、六月十日、日頃から哲学たいけん村の企画指導にあたられている方々が発起人となり、当村、および芸術文化ホールにおいて「梅原猛名誉村長の古希を祝うつどい」が盛大に催された。発起人は村長代行で中京女子大学人文学部長の久野昭氏をはじめ、安形亮照・笠原嘉・郷治光義・中村昌生・若山滋の各氏である。

第一部、茶のつどい（無我苑大茶会）には梅原先生とご交誼の表千家理事久田宗也宗匠をはじめ多数の来賓が出席され、碧南文化協会茶道部の全てのお社中が様々な流儀で参会者をもてなした。第二部、文化のつどいでは、「哲学と私」と題して梅原先生自らが演台に立たれ、さらに、久野昭村長代行を通して、講演参会者との和やかな対談の場が設けられた。締め括りとしての第三部、デザイナーのつどいでは日頃よりご親交の深い方々と梅原先生とが食事をご共にならぐつろいで歓談をお楽しみになり、先生の古希をお祝いました。

当日は好天に恵まれ、3部とも多数の参加者があり、盛会の一日であった。

# 「たどり来し道」より

京都新聞(夕刊)は建都一二〇〇年を記念して、平成六年一月より梅原猛氏の回想録を連載した。その「たどり来し道」は全二十二回に及ぶ連載で、ご自身の半生を豊かな筆致で描き、新聞記事というよりは一般の読み物としての光彩を放ちながら親しみの持てる一人の哲学者の姿を自ら語っている。無我苑において六月より二か月間、開催した「梅原猛特別展」では、その新聞記事の一部をパネルにして紹介してきたが、展示会参観者の間でも実に好評で、「じっくり読みたい」という声が多かった。そこで連載記事のあらましをもう一度紹介してみたい。

「人の人生について語る場合、まずその出生から語らねばならないが、私は、私の出生についてよく知らないのである。むしろ知ることを拒絶したというべきであろう。」(「生い立ち」①より)

出生の回想はこのような書き出しで始まる。将来を嘱望された若い男女の熱烈な恋愛。梅原猛氏である私は彼らの子としてこの世に生を受けた。しかし結婚を許されない家同士であったため、私は生まれて間もなく、若くして亡くなった生母の手を離れ、実父の兄弟夫婦の子として養育される。出生にまつわる一連の懐疑や悲痛を緋い交ぜ(ないませ)にして、幼少より多感な私の心はどんなにか揺れ動き続けたことであろう。



旧梅原邸 (南知多町)

「このような夢想癖は私の仕事とも無関係ではない。私の戯曲や小説はもちろん、私の学問も、あるいは少年時代のこのような孤独な夢想癖の延長上にあるのかもしれない。」(「少年の夢」②より)

出生の秘密を知った私は、小学生時代あまり勉強もせず、相撲のプロマイドを見たり、将棋を使った野球遊びなどをして過ごした。養父母は私の実父が頭脳明晰であるため、それほどふるわない私の学校での成績を訝った(いぶかった)。

しかし孤独な遊びを好む私はある時を境に一変勉強家になる。養母の一方ならぬ気迫に圧倒されてのことだった。

「おそらくそのとき既に、私は母が本当の母ではないことを知っていたのである。その母がこれほどまでに私のことを心配して、私を学校へ出してくれる。その母の気迫にさすがの私も心を入れ替

えた。私は人が違ったように勉強を始めたのである。」(「少年の夢」②より)

こうして勉学に没頭し特に数学を好んだ私は途中文学に魅せられて落第、浪人などの経験をしたものの京都大学文学部哲学科に進学する。

私は京都大学在学中、いろいろな師や学生と出会うが自分なりの批判と思索の精神を失うことなく哲学の道を進んでいった。そこですばらしい卒業論文を書きあげた。文部省から奨学金を得て、特別研究生として大学で学問をつづけた。そして生涯の伴侶、ふささんとの出会いと結婚。死の恐怖によって占められる戦争の時期を経て、私の青春は少しずつ明るく好転していった。

昭和二十八年、龍谷大学文学部の専任講師となり、二年後、立命館大学の文学部で教壇に立つ。そこでも多くの優れた学者と交流することになる。

「立命館に移って数年後、私は新しい哲学の創造を始めた。それは『笑いの哲学』というものであった。」(「思想の変貌」①より)

私は大阪の中座や角座に通い、落語や漫才の「笑い」を研究した。それは奇抜さゆえにマスコミからも注目を受けるほどであった。私の哲学者としての信念、つまり、どんなに苦しくとも自分で考えることが哲学であるという心がけは、常にたゆみなく励行されていったのである。経済的にはゆとりのない私も、最初の著書『仏像―心とかたち』がベストセラーとなり毎日出版文化賞を受ける。大学で

## フォト

梅原猛名誉村長の古希を祝うつどい

「梅原猛特別展」



「文化のつどい」



「ディナーのつどい」



西洋の哲学を教える傍ら、学問の中心を東洋の思想文化と考へ、文筆活動もそこに重点を置いた。知己としての様々な学者にも恵まれるが、立命館大学で主流をなす思想との不一致がもとで後に退職を決意することとなる。

こうして私は浪人生活を迎えるが、その時期は人生のうちで最も充実した文筆活動期であった。古代学の分野で哲学的な方法をもとに斬新な仮説をうちたてて『隠された十字架』『水底の歌』等を発表していった。そんな執筆三昧も三年で終止符が打たれ、昭和四十七年四月、京都市立芸術大学美術学部の教授に迎えられる。そしてここで十四年間もの長い年月を過ごし人生において貴重な経験を重ねていく。特に芸大移転問題ではたいへん苦労したが、学長の座に就いて、ついに念願の候補地に移転させることに成功した。

「私は同志とともに祝杯を上げたが、涙がとめどなく出て、ひどく恥ずかしかったことを今でもありありと思いつくのである。」（「芸術家との出会い」②より）

私は芸術家とのつきあいをとても大切にした。画家の三橋節子さんについての作品『湖の伝説』を執筆し、古代学の領域をこえ、多岐の分野に哲学的思索を広げていった。私の意欲は歌舞伎の脚本にまでもいたる。どんな芸術家であっても気さくにつきあう、そんな私の交友関係から市川猿之助氏のために『ヤマトタケル』を書き上げるようになった。その芝



居が、実に興行として大成功したのである。

「私は意外にも、六十歳をこえて戯曲作家に変身したのである。私は今でも冗談で、もう二十年ほど前に私が自己の才能に気づいていたならば、シェイクスピアやワーグナーのようになつたらうにと言うのである。」（「芸術家とのつき合い」③より）

昭和六十一年三月、私は京都市立芸術大学を退職し、国際日本文化研究センターの創設に着手、昭和六十二年五月、同研究センター所長となる。

私は次から次へとジャンルを問わず、幅広く多くの課題に挑戦を試み、常に学問的姿勢に徹している。そんな飽くなき探究心は国際日本文化研究センターを退いた後も、膨らみ続けると思う。

「たどり来し道」での梅原猛先生は、スーパー歌舞伎『ヤマトタケル』の中でのあの「天翔ける心」そのものとして読者の心に語りかけてくるようです。古希を迎えられてなお大空を飛翔するような先生のご活躍、とても楽しみみです。

## 梅原猛特別展

### あれこれ

特別展で展示した作品の中に「天衣無縫」と書かれた大壺がありました。書は勿論、梅原猛先生のもですが、壺をお作りになったのは藤平伸（ふじひらしん）先生という方で、現在日展評議員であり、京都市立芸術大学名誉教授をなさっております。

先生は七月二十一日ここ無我苑瞑想回廊にある展示ギャラリーを訪れ、この作品は先生ご自身、最も気に入っておられた作品であった、ということをお話してくださいました、その日は、同じく日展評議員で京都市立芸術大学名誉教授でいらつしやる三浦景生（みうら かげお）先生も京都からお越しくださいました。三浦先生は、梅原先生が作品の中でお使いになっている落款の作者で、ご自身は染織などの工芸分野でご活躍なさっております。



お二人の先生は梅原猛先生が京都市立芸術大学に勤めていらつしやる頃からの友人で、それ以来、芸術を通しての親交をもたれていらつしやいます。

哲学者でありながら、それとは別に様々な交流をお楽しみになっている梅原先生。人の人生における友好の深さと、その素晴らしさを感じずにはいられません。

## 本の情報

●平凡社

### 『鼎談・梅原猛の世界』

梅原猛ほか著

梅原猛先生の古希記念出版物。

生い立ちから哲学者への道、日本学への転向、その後、宗教学・民俗学・歴史学・地球環境問題など五十余年に渡る多彩な学問の軌跡を朋友たちと語り下ろした初の鼎談集。

46版 総ページ384

●三省堂

### 『死に別れる』

#### —日本人のための葬送論—

久野昭著

古事記・萬葉から近松・一茶をへて中勘助・古賀政男にいたる想念の系譜に、死別によせる日本人のこころの原型を読む。46版 総ページ210



### 瞑想回廊 2F ボディソニックのすすめ

伊藤証信の書いた『直観の世界』にはこんな文章があります。

「私は恋人に逢うことは逢いません。さうしてその愛に満ちた顔とその美しい姿とを直接に見て、たしかに彼女が心から私を愛してくれる事は分かりましたが、しかし私は彼女を単に目で見ただけではありません。目で見て心に知りました。けれどもまだ私は指一本彼女に触れません。私は目ばかりの人間ではありません。耳もあり鼻もあり口もあり手もあり足もあります。」

「直観」は身体全てによって得るものだ、ということを経験は言おうとしていきます。私たちの持つ感覚全てによって、切り離された部分ではなく全体を知ることが、「認識」の正しい在り方ではないでしょうか。



リラクゼーションルームにお入りになったことは、おありですか？リラクゼーションソフトの多くは地球の自然風景を題材にしています。オーロラ、砂漠、ニューヨークの秋など様々です。ボディソニックチェアに座って見る美しい映像画面、聴覚的刺激。対象の世界を体全体を通してつかむということ、一度お試しになってください。

#### 瞑想回廊 1F

#### ハイビジョン作品のご紹介

瞑想回廊 1F ハイビジョンギャラリーでは、ご来村の方々のためにハイビジョン作品を上映しています。メニューには次のようなものがあります。

#### ☆心象無辺ー清碧・矢作川

碧南市の東側を流れる矢作川を題材にその源流・支流・河口の四季折々の表情を写真撮影した作品をもとに、川のせせらぎや鳥の声などの効果音や書、色彩などを取り入れた作品。(時間 5分)

#### ☆へきなん

碧南市の自然、名所などをハイビジョンカメラで撮影した作品。可愛いチゴガニが走り回る矢作川の河口付近や碧南市の「市の花」花しょうぶが咲き乱れてい

る花しょうぶ園などの風景が見られる。(時間 5分)

#### ☆日本の名園

日本の代表的な京都の名園をハイビジョンで撮影。人と自然の融合、そして過去から未来への時の流れの接点ともなる庭の美を感じさせる作品。(時間 5分)

#### 来村者の声(アンケートより)

◆静かな環境で整備もされていて、時々遠くても訪れてみたいところですよ。お茶席も時折、使用させて頂き、設備も整いありがとうございます。(三重県 主婦)

◆昨年の夏、碧南市に転入し、子供が生まれる前に、これから住む町の色々な施設を訪ねてみようと思いい、散歩がてら寄ってみました。こんなにステキな施設が無料で使用できるなんて、とてもうれしくなりました。ボディソニックは胎教にもなりそうです。これから体調が良いかぎりは、ボディソニックを使用させていただきます。ありがとうございます。(市内 主婦)

◆先人の徳を偲びました。合掌。(岡崎市 男性)

◆たいへん良かった。近くの町から来ました。我が町にもできたらいいなあ

思いました。落ち着きます。現在はこのような施設が必要ですね。(市外 受付事務)

◆お茶席も感じの良いつくりになっており、またお庭を見ていて、それこそ現代の騒がしさが忘れられて無の今の自分を感じ、幸せとおもう。(名古屋 主婦)

◆梅原氏の著作を少し読んでいますが再読しようと思っています。(春日井市 会社員)

◆お金のつかい方もこんなゆとりでつかってほしいですね。(美浜町 サラリーマン)

◆家ではなかなか音楽をゆつくり聴く時間がないので、時々利用したいと思えます。子供はテレビの音、テレビゲームの音ばかり聞いているので、一緒に連れてこようかと思えます。(市内 パート)

◆こんなに良いところがあるとは知らなかった。哲学そのものがとつきにくく、堅苦しいイメージですが、少しでも身近なものという姿勢があるように思われて好ましかった。(岡崎市 公務員)

